野村祐介氏
医療法人社団尽誠会野村病院 理事長

神田享勉氏
金沢医科大学氷見市民病院 最高経営責任者

高齢者医療に望まれる病床機能別のシームレスな連携を目指して

高齢社会から超高齢社会に確実に進んでいる我が国において、高齢者の医療は様々な問題を抱えている。2040年問題で指摘される団塊ジュニアの親、団塊の世代の救急搬送が急増し、医療と介護の複合的なニーズが高まるものと思われる。この現実を前に、急性期、回復期の対応に当たる金沢医科大学氷見市民病院（富山県氷見市）の神田享勉最高経営責任者と、選ばれる慢性期病院を目指す医療法人社団尽誠会野村病院（富山県富山市）の野村祐介理事長に、現状と将来の展望を語ってもらった。

増え続ける超高齢者の救急搬送。その多くが多疾患である現実

神田　金沢医科大学が氷見市民病院の指定管理者になって17年経ちますが、それ以前より超高齢者が救急搬送される割合が急速に増えています。この状況が続くと、高齢者医療に求められる対応が十分にできるのか不安に感じることがあります。治療をしてもその後のケアをしっかりできるのだろうか。できないとなると患者を家族に返せないので、病院に長くいると筋力が衰えて体を動かしにくくなります。実際に一週間安静にしているだけで急激に動けなくなったケースがあり、大きな問題と捉えています。

野村　当院で言えば、超高齢者は単一疾患のケースはほぼなく、紹介状を見るとかなりの数の疾患が書かれている人が多いのが現状です。ということは、脳血管障害や虚血性心疾患などいろんな疾患を抱えながら生活をしている人が多